

# ヒューム『人間本性論』における情念の分類法

真船えり (Eri Mafune)

慶應義塾大学

本発表は、ヒュームの『人間本性論』第二巻「情念について」において、哲学における情念論史上ヒュームが新たに導入した分類法による「間接情念」と「直接情念」のうち、「間接情念」として分類される情念の特徴について考察することを目的とする。

ヒュームは『人間本性論』第一巻「知性について」の冒頭において、精神のなかに現れるすべての知覚を二種類、すなわち、印象と観念に分けた。印象には二種類あり、感覚の印象からは感覚の観念が生じ、反省の印象は感覚の観念から生じる。この反省の印象に、情念と情動が含まれる。印象は、第二巻「情念について」の冒頭では、原生的と二次的の二種類に分けられる。この区分は、第一巻では、感覚の印象と反省の印象とに分けられていたものと同じ、すなわち、原生的印象とは感覚の印象であり、二次的印象とは反省の印象のことであるとヒュームは言う。ヒュームは、身体的な苦や快は、多くの情念の源泉ではあるがそれ自体は情念ではないとする。「例えば、痛風の発作は、悲しみ、希望、恐怖というような情念の長い連なりを生み出すが、それ自体はいかなる心情や観念からも直接には生み出されない。」身体的な苦や快は精神あるいは身体に原生的に生じ、「先行する思考や知覚がない」ため、反省の印象ではないからである。

反省の印象についてヒュームの行う区分は、「穏やかなものと激しいもの」という二つの種類である。「第一の種類には、行為や芸術作品や外的対象における美醜の感覚がある。第二の種類には、愛と憎しみ、悲しみと喜び、誇りと卑下がある。」ヒュームは、これらの情動あるいは情念について、「それらの本性、起源、原因、結果を解明しよう」と述べる。

ここで、情念についても一つの分類法が導入される。それが「直接情念と間接情念」という分類である。直接情念は、「善悪、快苦から直接に生じるような情念である」と説明される。直接情念と間接情念は、善悪、快苦という原理から生じる点では同様であるが、間接情念は、その原理からだけでなく、他の諸性質と結合することで生じる情念であるとされる。間接情念には、「誇り、卑下、野心、自誇、愛、憎しみ、妬み、憐れみ、悪意、寛大およびそれらに依存するもの」が、直接情念には、「欲求、嫌悪、悲しみ、喜び、希望、恐怖、絶望、安心」が分類される。間接情念は、第二巻「情念について」の第一部「誇りと卑下について」と第二部「愛と憎しみについて」において詳細に論じられ、直接情念は第三部「意志と直接情念について」の第九節「直接情念について」において簡潔に論じられる。

情念の分類に関しては、以上のほかに、快苦から直接生じない情念の分類がある。これらは第二巻の冒頭ではなく、第二巻第三部の論述の途中でなされる分類である。ヒュームはそれぞれの分類に入る具体的な情念を挙げており、これらの分類法には特

に問題はないように見える。例えば、誇りと卑下は激しい情念に分類されると同時に間接情念にも分類されているが、これらの分類は概念的に排他的なものではないことがわかる。しかしながら、情念に関してヒュームの立てた分類についてはヒューム解釈者のあいだで論争がある。その論争は、それぞれの分類は「情念について」の他の箇所や第三卷「道徳について」における論述とどのように整合的に解釈されうるか、間接情念を論じるヒュームの意図はどのように理解されうるか、などについてであり、一致した見解には到達していない。

とはいえ、ヒュームの情念の分類についての論争がどのようなものであれ、ヒュームの「間接情念」が『人間本性論』における観念説の方法論にもとづいて論じられていることについてはヒューム解釈者のあいだで異論はない。本発表では、「間接情念」として分類される情念にはどのような特徴があるのか、『人間本性論』におけるヒュームの方法論にもとづく議論について考察する。